谷口雅彦さんへ

森下隆　慶応大学アートセンター　土方巽アーカイブ

このところ、土方巽の『病める舞姫』をダンス作品にしようという企画が続いている。かつて、もう10年以上も前のこと、ボリス・シャルマッツから「病める舞姫」を作品化したいとの知らせを受けた時は驚いた。「病める舞姫」がダンス作品になるのか、いや、そもそも『病める舞姫』はフランス語に翻訳されてもいないのに、ボリスはどうやって『病める舞姫』の世界を理解、解釈しているのかと訝しく思ったものだった。

土方巽が「禁色」を三島由紀夫の『禁色』からタイトルを得たように、ボリスも『病める舞姫』というタイトル、フランス語では"La Danseuse malade"だが、これをいたく気にいったのであろう。そして、アンジェの劇場で初演を見た時には輪をかけて驚かされた。その破天荒な発想と大胆な演出（仕掛け）には舌を巻いたものだった。

日本ではそうはいかない。ダンスのほかに、朗読（劇）や義太夫語り（浄瑠璃）などでも、「病める舞姫」は作品化されているが、どうしても、『病める舞姫』の土方巽の言葉にこだわることになる。後に『慈悲心鳥がバサバサと骨の羽を拡げてくる』にまとめられる土方巽の語りが始まりであって、『病める舞姫』というタイトルそのものは土方巽の発想ではないが、今となってはそこから逃れることはできない。

そこで谷口雅彦さんの写真である。谷口さんは、かつてアスベスト館で実施していた写真ワークショップ「コルブス」に参加されていた。「コルブス」はその名のとおり、写真による身体表現をめぐって、錚々たる顔ぶれの写真家が指導にあたっていた。細江英公さんが中心になっていたワークショップだけに、谷口さんは舞踏と土方巽については深い理解があろう。かつて和栗由紀夫さんを撮影した写真はその真骨頂である。加えて、その後の谷口さんの写真家としての精力的な活動にも瞠目である。細江さんの主観的ドキュメンタリーではないが、谷口さん独自の舞踏観と写真表現をふまえた写真のドキュメンタリーが本書で開示されていれば、もって瞑すべしである。

森下隆　1950年福井県生まれ。早稲田大学文学研究科前期課程修了。1972年からアスベスト館での舞台制作に関わり、土方巽の死後、土方巽記念資料館の設立と運営に携わる。現在、慶應義塾大学アート・センター所員。土方巽アーカイヴを担当。主な著書に『土方巽　舞踏譜の舞踏―記号の創造、方法の発見』（慶應義塾大学アート・センター、2010年）、編著に『土方巽の舞踏―肉体のシュルレアリスム　身体のオントロジー』（慶應義塾大学出版会、2003年）、『不世出の舞踏家　土方巽』を秋田魁新報に連載（2011年1月～2017年1月、毎土曜日）。